

論説文講評

森忠彦

今年の論説文は例年以上に力作ぞろいでした。募集サイトに載せた「論説文ってどんな文章？」をしっかりと読んでいただいたようで、自分の意見を、経験を踏まえながらまとめた作品が集まりました。

優秀賞に輝いた「女性の生きる世界に生きる」は、まず書き出しの「日本の女性はダイヤモンドの原石である」が光っていました。女性解放運動家の平塚らいてうが25歳の時に発刊した雑誌「青鞥」に寄せた有名な一文「元始、女性は太陽であった」を思わせるような、強いインパクトがあります。一体、どんな意見が出てくるのだろうか。読者の関心を引き付けられたらまずは成功。書き出しの一文は重要です。

筆者は産婦人科医の娘であり、知人が高齢出産で苦勞したなどの自らの経験をもとに、現代の日本社会が抱える少子化対策と女性の社会進出の問題点について考えました。高校生のためのリーダー養成塾で知った学者の話や厚生労働者などのデータ、安倍政権の成長戦略の数値などを引用して、いかに女性の社会進出には課題が多いかを指摘していきます。現代社会への強い関心が随所に現れた、まるでジャーナリストか政治塾志望者のような高いレベルの論説文でした。

高校生としてはかなり挑戦的で意欲的な点を高く評価しましたが、一方でデータや資料の引用が多すぎという印象も持ちました。データや証言、言葉の引用は説得力という意味で重要ですが、多すぎると文章自体が難解になり、またお役所の報告書みたいなものになってしまいます。今回は執筆の時間もあり、いろいろと調べることができたからだとは思いますが、大学入試や就職試験の時は1時間程度の限られた時間で、自分の記憶の中のデータしか取り出すことはできません。資料は状況説明や持論の裏付けのために最小限あれば十分。論説文で伝えたいのはどこかで調べた事実関係ではなく、事実を背景にした筆者の率直な意見なのです。そこがやや薄いような印象を持ちました。

「10年後」についても「日本人女性の一人として、産婦人科医の娘として日本の現状を変えたい」という結論がややまどろっこしく感じました。もっと明確に医師とか、政治家とか、官僚とか、という職業が出てきた方が分かりやすかったのではないのでしょうか。実現性はともかく、思い切って断言すればいいのです。遠慮はいりません。

奨励賞の「世界と対等に意見を交わすために」は、3週間のイギリス留学の経験から、日本とイギリスの授業の比較を論じた作品でした。ディベートやプレゼンテーションが中心のイギリスの授業に驚いた筆者は、先生の話聞くことが中心の日本の教育方法への疑問へと考えを巡らせます。「10年後」は「日本の教育を変えていかなければならないのではないかと論じ、「ではどのような教育がいいのだろうか」と自問し、自らの考えを述べました。この流れには無理がなく、すっきりと読み進むことができました。そして筆者がどんな分野で活躍しているかはまだわからないが、「謙虚さ、まじめさ、聞き上手、という日本

人の誇りを忘れずに世界と関わっていたい」と結びました。高校生らしい実体験に基づいたわかりやすい内容でした。注文点を挙げるとすると、日本人の特徴に気付くまでの過程がなく、もう少しそこは丁寧に具体的に書いた方が説得力があったと思います。外国に行ったからこそ見えた外国の悪さ、日本のよさもあったことでしょう。

学生時代に外国に留学したり、長期旅行をした人は少なからず、このようなカルチャーショックを受けるものです。先進国はもちろん、途上国に行った人はいかに日本が豊かで平和であるかということを実感するでしょう。日本や自分を見直すいい機会ですから、ぜひチャンスがあったら若いうちに外国の地を踏んでみてください。

ただ、最近はこうした人が増えているため、海外との比較文化論を取り上げるタイプの論説文は珍しくなくなってきました。ありきたりの驚きや印象論を書いただけでは審査員の共感をえることはできません。かなり具体的な例（できれば失敗例など）を挙げながら、読む人の共感をひく仕掛けが必要になってきます。友だちに留学の話をする場合、面白いエピソードを盛り込みながら話せば、目をキラキラさせながら聞いてくれることでしょう。論説文も同じです。相手をドキドキ、ワクワクさせる力が重要です。

この数年、日本を訪れる外国人旅行者数は増えています。海外に行かなくても外国人を街角で見かけるチャンスが多くなりました。異文化に接するという体験は、論説文を書く上でも非常に書きやすくなる、魅力的なチャンスです。片言の英語でいいので、近くの外国人に話しかけてみてください。きっと面白い話のネタが見つかりますよ。